

さようなら原発 1000万人ニュース

2012年10月14日 臨時号

日比谷野外音楽堂に6,500人!

10.13「さようなら原発集会 in 日比谷」報告



政府は2030年までの原発・エネルギー政策のあり方について、国民からの意見を募集しましたが、圧倒的に出来るだけ早い時期の原発依存0%が支持されました。こうした声を背景に、脱原発への流れをより盛り上げていこうと、10月13日に日比谷野外音楽堂で「10.13 さようなら原発集会 in 日比谷」が開催され、会場を埋め尽くす6,500人が参加しました。

オープニングはYaeさんのコンサートで始まり、3.11に生まれた子どもたちを歌う「名も知らぬ花のように」などを熱唱しました。主催者を代表して呼びかけ人でルポライターの鎌田慧さんは、JAグループが脱原発にむけた方針を採択したことについて「原発は農業や漁業と絶対に相容れないものだ」と高く評価し、「すべての原発は潰そう。再稼働は絶対に認めない」という決意を新たにしよう。そのため1000万人署名を達成しよう」と呼びかけました。

都合で参加出来なかった呼びかけ人の一人である落合恵子さんのメッセージ紹介に続いて、哲学者の高橋哲哉さんが「原発とオスプレイの沖縄配備は国民の声を政府が聞こうとしないことで共通している。人の命と健康を最優先にしてする国に変えなくてはならない。その第一歩が原発廃止だ」と訴えました。

福島からの報告は「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」の森園かずえさんがおこない、「1年半経ってもあの日の記憶に引き戻される。今年の夏、福島では蚊や蛾などの小動物が去年に比べてずっと少なかった」と異変を報告。さらに子どもたちに発生している健康被害や、それにも関わらず外でマラソン大会やお祭りを行っている現実を訴えました。



また、10月1日から工事再開が強行された青森県大間原発建設予定地の「あさこハウス」で闘っている小笠原厚子さんからは「政府は新規原発の建設を認めないと言いつつ、大間原発の建設再開を認めた。しかし、私の母が土地を売っていたら今頃は大間原発は稼働していただろう。これからもあきらめず闘い続ける」と、決意を表明しました。

最後に作家の大江健三郎さんが中国の魯迅の言葉「希望は将来にある」を引用し、「原発再稼働など、私たちは侮辱の中に生きているが、こうして集まり続けることで希望を作ることができる。希望の道を作るために原発を撤退させるしかない」と強調しました。

閉会のあいさつは脱原発を宣言して注目を集めた城南信用金庫の吉原毅理事長が行い「経団連などは原発の存続を求めているが、長期的に考えたら大きな経済的損失だ」として、原発の処理にかかる膨大なコストを上げ「いま、経営者に求められているのは脱原発に踏み出す勇気だ」と述べました。



集会後、呼びかけ人の鎌田さんや大江さんなどを先頭に、日比谷公園から東京電力本店前、銀座、東京駅を通り、常盤橋公園までのパレード行進を行い、脱原発へのエネルギー転換を訴えました。特に東電前では、「東電は責任をとれ!」「損害賠償を行え!」などのシュプレヒコールを繰り返しました。(写真: 今井 明)

発行:「さようなら原発 1000万人アクション」実行委員会
101-0062 東京都千代田区神田駿河台 3-2-11 連合会館 1階
Tel. 03-5289-8224 Fax. 03-5289-8223
<http://sayonara-nukes.org/>